



快談雪裏竹

美妙稿



本問文庫
文庫 14
A 61



文庫14
A61



快談雪東竹卷一

東京 推耕蛙船編

第一 故郷の殃禍

はろ、英倫無雙の明王西弗勒大王が事蹟を尋ねるに紀元八百二十年代の頃
 全土の紛亂を平け永世の美基を建給り、葉波多の御子も葉波多王の
 第四の御子も在り、尊得て萬小嶋樹に自らせ給り、御父母の慈愛
 一方をなほ、第五と云ふ頃、王位より第三の御子も葉波多と申す君
 御座り、葉波多王の御孫、葉波多王の御孫、葉波多王の御孫、葉波多王の御孫、
 羅馬國へ押渡り、良師を選ばせ、只管小向と云ふ、教へ給り、素り
 擢衆技群の質、聞知十の器、よ、おせん、幾程も、上達と、遂に其師
 も古を巻子見聞の人も首領、斗小至給り、さ、御父葉波多王の御孫、
 も勉勵す、教導を、給り、如何、葉波多王の御孫、
 交て更なる、武道を、打棄て、見も返さ、終日益する、遊戯、心を籠
 て在る、此事早晩遠近、聞真り、の、鳴有る、葉波

韓を日怪し目驚き心は傷め斯くも亦も覺束る... 幾度か警
のりけきも免れ火に焼くも露あふ効験のりきまば誣のり
思給ふみ誑術も其儘小者と暮るの秋と過る早も今年を亞弗勒
が二十歳を迎へて紀元八百七十一年の春と成るは是より先英倫
のり抹人と呼ばれ猛り軍兵丁林國より攻寄せ我意に任せ人を戕
以國將を横をて土地を荒せること亂暴狼藉甚し連年斯る様を
亞弗勒が御兄君なる葉策列王其度毎に許多の兵卒を蒐催をて辱之
敗れり其も其獨獨え依然として止まじ既に今年も枯樹嵐と呼ぶ者
大兵を撃て相寄來つ勢焰當り難き急報葉策列王許來り事
漸小度重なること亞弗勒が驚憂いてをて兄君の御身上又國の行
亦も心元なるみちるに此處は如何と云ふ心地悪し事なるは疾々歸
とせ給へり頻に勸め止まじまじ葉策列王點頭給ひ聽て此由を諸
臣に御知らせり後行の準備をて整へ法如何なる故も且弱なる
婦幼を悉く殘置る人目達る處に思ひも護衛も唯勇力の勝る

ををめり召連て亞弗勒が博役なる頼訥と云ふ委任を夜に幼き恩に
をのり羅馬國を立出でる英倫を急備せし其て儲指すつ爰に又英
倫は於て彼れ丁林人愈力に增長きて勢宛に破竹の如く既小諸城を陷
き這回を倫敦府へ押來りて由聞えり葉策列王益憂に免れ
角を評議の末に敵を間近く寄せざる前小迎撃つべき事定まり
五月十二日の曉に三萬の兵を城に殘し親一萬騎を引率きて倫敦を打立
て給ひ免れ角に次日の黄昏に謝橋迄來りて此近傍に敵を
待つた善人の心を應て其處に陣を布き篝火を許多燒かせ
今も今も待暮せし更に襲來る様も無し然りしを葉策列王
絶て此を油断せず御體も腹を給ひ蕭然として在る夜ハ
静寂に風寒を星半に月明に征陣に出る哀を誰
をも殊なる處に別て身を力乗れ尊き
の為民の爲と斗り斯る折に暴露せさせ給ふは御傷も亦も
有難き事なれと侍らば人々も更にも言えに情無き雜兵等に至

皆感涙下咽... 昔時越王が酒を流せ... 劬吳子が癱を吮...
時七斯や有... 想像... 然程三月十三日... 時夷東...
北の方より... 鬪塵... 人馬の響漸と聞... 敵の寄...
... 打贖遣れ... 其野無慮二三萬騎... 此方より倍...
... 斯れを... 葉策烈王八兵們... 下知を傳... 敵を味方より大勢...
... 中尉... 詮無... 兵們隊伍を乱... 嚙頭を差揃...
... 塵粉微塵と逆撃... 此方より... 葉策烈が訓練せ... 精兵あり...
... 聞志了持人... 成敗孰否... 今日在りと... 且心と思ふ...
... 日來より勇氣も増... 力も出で... 捷も... 怯も... 早夕暮... 近づ...
... 勝負更... 果を... 葉策烈を焦燥... 騎り... 馬も驚...
... 必死... 指揮... 漸く一陣を衝... 尚去を見る...
... 味方も勝... 騎... 猶奮撃... 其折... 敵の遊軍... 四百餘騎... 何れ...
... 程一の思... 横方... 葉策烈が麾下注目して衝入り... 咄嗟と斗

不慮の事小駭... 葉策烈が將士を更... 難兵を主打...
... 霧時が程防戦力を盡... 雖も味方を既下疲憊... 敵を新...
... 勁兵を鋒先強... 勢猛... 息をも呼吸せ... 挿立... 瞬間...
... 者幾人... 數を... 葉策烈王も今覚悟を决給... 曲...
... 騎有餘... 殘兵を取集... 葉策烈を引請... 死...
... 戦子程了了持人の大将... 枯樹嵐... 擊靡... 軍勢を引返...
... 寄近づき... 十重... 十重... 圍... 最も危... 極度... 斯る處...
... 持人の軍中... 俄頃... 乱駭... 味... 敵... 呼... 壘...
... 聞え... 其意を知... 葉策烈が事... 心裡... 五分の勇...
... 惹起... 尚一心... 拒... 程... 忽地敵を驅散... 現出... 若武者...
... 今其人を名状... 妾... 言... 一... 二...
... 色... 白... 梨花... 積... 雪... 如... 眼... 清...
... 深山を透... 出水... 似... 身... 鉄... 細... 編... 鏡... 穿...
... 外頭... 帶... 銅車... 銀... 鉄... 甬... 戴... 長四尺... 斗... 覺...

○他多人間小来
好このと怪まる

又其行逸ある事言語に盡さずくもつらに其雅幽るる事筆して馬
之を難くする正は是れ月中の桂精也者なり桂樹斯る有林
ありあはれを兩軍均しく打駈す遠く何者ともふり茫然と目成
り居る爾時若武者遠近を信と見直きて呼も採押我を誰とのを
る當國英倫の前王葉策幹の第四男もて尋弱の聞の著るも葉弗
勒るるを知らざるも性一日すは羅馬國小安閑とてつらつれと
も本國の事元々天晴一臂の力あり凡上は貸を多るせを
と思ひはるるを竊るのふ馳歸りある甲斐ありて此処に泣くを得ぬ
りつらつれを膽く潰さるる寄せたる其手は大将を枯樹嵐と見
るも憐眼吹咆と現るは葉弗勒が武勇の程受て見ると勢猛く
罵りて三百騎許の兵を前後に立あせて馬は拍き縦横無碍に所
立ちを丁林人の軍勢愈駭り思ふ其儘踟躕るを枯樹嵐を見て
冷笑に柵を分近武馬道は暗を聞きと謬傳上逸莫單騎の若輩

○君

斃さす難事やと有る途々此處に來りハ諺に曰く夏燈の飛蛾の死
を冀ふも殊る事也廣言吐きある酉報も我軍勢の手練は得者人
兵們猶豫する事りて聲振揚と下知を兵們を力を得て吐と斗り
小舞波る作ま又々之るも箱麻の如く又竹箒の如く團は身を葉弗勒
あはれ世のつり武勇は勝れ者とも免るべくも見えらるる
第二 森林中の弦月
斯る處は思ち又色薄黒子一人の大将漆皮威の鏢盾を白布の封巻
ゆるる左の手に右の手に現るる小槍振り振舞哉汝輩が腕よりそ
葉弗勒も抵抗し車に向ふ螳螂も尚及に難く業るるも敵手も其將
我に此君は從多るぞと羅馬も帰陣し頼訥も望む敵手も其將
枯樹嵐其處に退りて欺りて百騎を得足るぬ兵卒も魚鱗も構へ
と驅回しが葉弗勒も圍り敵も打驚りて顧る隙を伺ふりて葉弗
勒も無二無三の躡躡をさるる何ら以て堪えざる皆紛々と觸倒さる
て矢庭に命を殞る者四十一人及びらるるも葉策列王は遙に此時

さきさき失ふが誠不恩の謝... 殿てこのも武勇を得と手強敵取挫... 似着のぬ今日の様毫々不審晴... 言葉... 零時を無と居あり... 體... 自述... 嗚呼... 聞... 漸... 長... 事... 國家... 思起... 兄上... 御留量... 愈... 非... 願... 意... 奉... 是... 侍... 頼... 某... 傳... 役...

江守と今三歳... 妹美麗と呼... 是此年十歳... 江守之兄... 將枯樹... 拔擢て重役... 其請... 事漸... 花を早晚散果... 引續... 傳... 勢甚... 喜... 聖時の香... 夢... 現... 傷... 事... 運... 通...

50
200
50
50

4:15

華策列王を他より大に辱を傷められ早に根を絶ち多し
管一方法を運ぶ給に夜もよるを眠給ふに御心筋を揣らるる
其知憂がふり日ひ 危篤行きて今頼まらる見えさせ給ふ
向う漸く 亞弗勒の扶援を得ず強き敵を撃平らるる
喜むと思ふ間りる 疫るる悪病此國を起りて
敢て命を殞て者盡きぬ由る心苦き 限無く免る角
と思屈るる 此身の腕甲斐無きと 積りて斯る様を成行
事最早才復す及比り候なる申す及むぬ事 後法
超絶て候は心元けを腐らるる 親類先を不孝の罪と此身の
不肖なるため痛く或言ふ苦のたると唯二つ候るる最

ことばはぬれが

苦辱 宣ひつ又亞弗勒 野遊り 西弗勒 項吾 儕が必死を救給
又國憂を除き 事ハ心肝に銘徹あり有難き事なり 今
命盡果て 此身の奴馬車 元後少を位に 継給ひて 才長
平穩に 國を治給ふべし と言ふ言毎に 息緒も漸次々々細行
侍小皆々應に出づを賜 断つる思ひを 同志 杜鵑血を啼く空
この身を重畳に見ゆる 雲脚を 別れつる逢ひぬを 愁歎
釋より 涙の外に物を無き 憂れを知りて 音をせし 揮
螢火を見ても 是れ此有 彌路を越て 無漏小なる 戒
と思ふ 情想 眞澄鏡影 微明に 夕月と共 果敢た 消給
の 事作る 今も 孤石小 恩愛を 忘れ 断難く 皆跡を 泣崩折
折る正體なるを 華策 幹を 我と心を 勵ま 歎凝てを 却る 悪
りるんと 人々 或は 慰め 或は 勵ま 厚く 後世を 於 吊り 給ふ 斯の
八月 赤小 至りて 華策 幹を 亞弗勒 國王の 位に 即つ 國事 成
し 世 給ひ 渾て 英倫の 人民 其時 於 華策 列王 崩給ひ

絶望はく

悲しむれ素より日外れ合戦... 功小西弗勒... 皆萬歳と叫ぶ... 絶る忌婦... 外に今國內流行する疫病... 古今小辱... 御兄君葉策列... 回父君葉策... 抱我揚給... 給る... 國より良醫... 事代二十日有餅... 以子せ... 固り孝心... 天小叫地... 紅涙袖

二九

を浸せる道... 泣崩折て在せ... 折善... 頼訥... 直して禮の如く... 贈子帰遣... 体参... 勵精志給... 英倫一國... 増... 思極... 早晩... 消滅を

快談雪東竹卷一終

快談雪裏竹卷二

東京 権耕蛙船編

第五 枯樹の夜嵐

然程其年も月ごらく暮て明き紀元八百七十二年と改まり
 廿二歳と成給り去歳の頃より引續きて二方あるぬ勵精し國猶平穩
 たりはれども人数最少く倫敦に在る共其數僅に五千許に
 老多る者多し物物の用を立つべし一午を得る足るを之を準備
 地方るも皆一のる海より特別頼訥が守るる
 るして三四百人を過ぎまば是も奈何とてや救ふべし
 御心を悩ませられ日と夜とを思案し
 経給ふは同年の九月頃世間々々
 頻りに達近り風聞をきき
 三月十三日諺橋の戦争に元兄君が一箭にて枯樹嶺を
 攻再度來つづき理由を
 傳説する

Geography by Mauley
Primer Shellon



と貞様云々死地を陥たる奸謀詭計獨それのいふに
 昨日近き阿容々々と毎に愛ふを我子附子我子仕て此城を在りしを
 見よ此地の事候を泄さるに丁抹り報知る疑わし
 否をいふに程點檢を折り見えざるに遮莫天經ハ跡にそ
 りをいふに警備時ハ逃るもおを遊をさる方らに兵們心る落を
 とく順て高擧り登給に倍と見直して聲高り物々や狗黨め
 奸徒終一死免れたりとて僥倖得銀を説子そららるるを
 徳天順に澤民不及は古今を我君ハ虎髯を再度燃らんと
 て恩命荷つる頼訥迫り降参り勸言可笑や單身ありとも我
 亦辱も一天の君の仲を承り此城守る身ハ何れ軍兵力何
 負糧あり楯籠る難らるる正門後門處を撃ち好ま
 るる攻来ねと物由動せぬ不敵の堅身動枯樹嶺獨地を屯振絞り這癖
 物が大膽なる飽まを我を辱めざる報早て觀面眞罰を思知せざる吳人
 づと率志士卒を驅立々々叫號人を攻めさるる城兵皆能く頼訥大人小

従ふ事なるはれが大軍を盾とせし撃てを靡け靡けハ撃ち
 以て果つる見えざる何者の放ちる西城口の傍り忽然
 火手起る程折も折とも西風強く見る此處彼處に燃傳れば
 城中の混雜ハ一やろを屍湯水の沸如く上を下と驢動志更不秩序
 もつるを頼訥大人ハ力盡馬四口々々士卒を揃ふれり
 ふむく様もるる今斯よと思給りて只諸共死を許さ給
 二人此此を帰し備り君の許御聞り達せよと死を許さ給
 えぬが争難く仲をふらさ御洋連の其為る是處まで卒も功
 版して走帰り候るに云掛るる逆落る涙と日來頼訥が倉
 尊に重きキ標をこたはれ知れれを智勇尋常なる典
 弗勒も流石に股肱と頼頼訥が敢る命を殞てる不慮の
 珍事荒然と呆る事半刻許稍す思ふに太子息を吻り
 魁脊が為せ誰詭を憎ても尚足るを此方不自ら難兵
 の群入りたるを糊口を為す初より仕たる枯樹嶺

内意は受け危子敵地へ入りて誑詭を以て枯樹崗を免れ
此忠を以て思ひ及ぶも元兄君並信義殿に置給はば彼が奇計も
水泡を以て信や怨を懐き及ぶも先措きつ今一言竹達
二人を問ふ事何れ頼訥が討死する後彼が毒を二人が子等と
幸り逃出たり又この又這回寄来りて丁持人と其數幾何なるも具
告し告しと冒へ二人の雜兵果たりてさへ候頼訥大人が奥本并
御子達を如何せんを給ひの混雜るれを頼信も只丁持人の人數
を去歲の如く比類はるに凡そ五萬五千人候と云ふ候
御弗勒切と云ふと云ふ胸轉るるも云ふ候と云ふ

第六 瀨岸の落人
其を儲置きつ又又頼訥を頼訥を心利あり二人の雜兵を呼寄
と戰の光景は油を御弗勒切君に言上せよと云ふ逃ちり候
之入る敵兵の隙を潛り夫人若山子江守并子娘美麗等が在り候
の奥より先早若山子打向ふ年來の契て浅う候と云ふ今若山子

御身も見聞 結らば我思慮の足らざるを思設ぬ
不費をとり君の仲を度參らせ守り候此城は攻められ候今
罪科免る處は候我を心を定め候此後頼も口御身と二
人の重寄り候一はバウ恩愛のりなを断ち執着の柳を打壞り
て敵の眼を觸れ候前より急ぎ此處を若延て何處へ身と思
び江守と美麗を護育して父が汚名を雪ぐ給一我情愿は是れ
あり外に言ふ事候と云ふ頼て這回江守と美麗と線呼
近つけ藤の辺に押居て候この頭を撫で候やよ二人共今も父が聞
る事候事候を罷て忘れ候凡そ其孫を常々復て其任に當
者も其義を盡きて候後術計盡きて力究まらば詮術をられ候二死を
りて君恩に答へ奉らん候と云ふ彈て人の常分を這て你達知らん
近く父が身を取れば我君の御寵愛ありて分り超ふる孫を食べ
此城を守らば此身を負ひ候其義を盡きて固よりある
不見より城を落され候是力究まらば父が此後為さる

江戸と美濃の打騎りつ 墮ちぬる為の細繩りて楚と馬不結
附け參順之の轡を把り辛うじて後門より逃出て行處を編み
談合するふ參順が家此處より坤の方より廿四里のまりを隔てる
格町と参順と此より三町を隔てる時其處より身を忍んて定めの
たれと本街道より行ふ時を影護り事あられば間道より東
浦曲傳へ至るんとて預て居る身をつらうに只管
急なたりあつた其日の蒲刈道より六七里の道を行きて多福まで來
りぬる思ふよちまてて早ういへと主從齋を
松の木蔭に休みて沖を過り見且せぬ雲井小紡る沖津
津寄せせぬ一と返してまゝ寄せ來つて岩脊に
高き者も身を導く吹拂はけく瀨風を乱る蘆のよちまて枕
高くも寐ぬるぬ身とてはてしなくや此身ぬぬ浦曲より
漂泊て何處残りてと定めるも海世の難の橋小舟繫ぐぬのさ
根を絶てぬ絶てぬ絶てぬ絶てぬ絶てぬ絶てぬ絶てぬ絶てぬ

この
後

人々憂事ありとて斯る悲懷より身成忍ぶ悲懷より超
ゆるめぬあつとと悻然として主從が交互に袖を繰りけ彼方の
天を見返れば白雲遠く單籠にて任す物影の語り聞きつれ
まらる世の轉變を免れぬと豫て物語を聞きつれ
とも思懸きや早晩我身の上を在る均志く去り得ぬ
初てや思はば其處に躊躇する程に忽ち地後牙を置然と轟轟
人馬の脚音這く什麼如何と主從が驚きあつた打瞻遣はす
大約三十人皆物見し身を固めつ早間近く來る様を言ふも
る手追兵の兵這も躊躇とせん喃悲や憂々いふれ我夫の言
葉を守り來りし今又三日の葛蒲草十日の菊とちりたるこの
吾儕一人の死を厭ふぬと夫の記念の江戸と美麗なれぬ
そ殺さるが亡夫の言を面らぬやよ參順の言を
しの忍ぶる堪ぬ村肝の心苦さ胸苦さを想像れて哀なる畢
竟苦草草が身上の人の猶次の條小解るん

第七 苦草の秋風

却説苦草が若輩なる参順も此體裁一度驚きし素り
別氣の壯俊るれ早く思悔さるる假令今も足らず
直走る走れども逃逐せん事覺束るれ大刀の刃のつづく
限り御守かて見むと其儘に此由駭かた驍を引
抜き右手不持ち程度好し處或立出でて苦草等後押圍
ひつ寄さるを待て介侍たり斯る處に追手の共え瞬刻に
寄近す吐と揚しる鱗波とこりや此の頭人と覺し者馬
鞭ち進出を皆々齧ち打膽遣れは是則別人を又この
雜兵懸賣るるをさるやと急立つ参順先ち懸賣大
番不馬やる苦草主從抑殺門の西の城戸火を放ちし見
亦此懸賣が智術あり其時我君枯樹嵐王吾儕を呼びて勞給
つ又改めて仰さるる頼訥も既死すおの事并し
の重も生死存亡料らん若這收達を生置るが我え更なり

のの

が身も仇とさるえや必定る然れども我え其面を一度見たる事
りらる小沙え永く附從して心不見覺つめ此儀を思
解つ逃さるるを不疾く追ねと置加し餘る御言葉承り
つと御受し直ぐ手勢を催きて其處此處と尋ぬる程
不圖を此路不迷入り行はるる更し又何處ありと分解
由無く免角を對向を見れも賤の者松の根方
鮎ひ居る萬一をれりと思ふの足趾を早めて近する熱見
れか何る塘や尋ぬる苦草主從るれが緒に於斯え及べるれ
をれが今も輩の鼠籠の鳥も殊るるを益なき抗其言
手を束ねて尋常不我刃不掛り袖と多勢を憑を雜言
過言参順の口惜さるやそれ奸賊膽大己が為を悪事
の顔芽阿容々々吐きし頼訥大人が夫人を御子達の
御身もまて無残の刃を加へし人を知り此参順が息づる程ハ
覺束るる先年我大君を欺奉り這度ハ又りや

我主なる頼訥大人非業由死を遂参らるる時
 怨の多此處より逢りて其の賜國土の仇敵主君の讐生けては歸さ
 ず覺悟せしむと呼ぶるを待て彼の魁賣を物な言てせを疾く
 蒐れと烈しき下知す兵門承たりぬと應も何とぞ打倒せんと右左
 振閃のや應手物を或え拂ひ打落し隙を揣りて所去る神變不
 思議の大刀風不露時が程十餘人刀下の鬼とたつとらう此光景
 不懸を獨惑感する兵門此罵り擲中より擊丸めりたる物取
 出向一息吐と吐き血刀提けて立ちける參順が眉間を
 目懸け力を究め擲ちたる狂達を憐れむ左の眼を打
 透されおが儘其處へ倒れんと兵門を見詰りて此時遅
 彼時早思懸る頭人魁賣を馬より擲と落てりて這
 何故をいひ見れり今迄彼方より立ちしと思ひ參順は
 早晚飛來る丸を避るるやいなや魁賣の側へ突と寄て
 身を沈ませ其馬の前足拂然と難なるを世無比類なる

剽技を兵門の一度を驚かすなれども註術を
 前を立現れ均しく打て蒐るるのめりる參順愈も
 堪を大魁賣を擊んぐと支ゆる兵を斬伏々々頻りに進む勇力
 剽技譬へて颯風の船を碎ち鯨の沖へ暴るるの如く打向する者も
 向する者も皆散々敗るる生残れるも今又抵抗し氣力も失
 盡きて魁賣のりるも先鋒争に這るの如く逃行するを蓬を返
 せと參順を呼掛けるの心附き苦草が牙を見返を這と控も
 以のり行牙の道より前の如き兵一隊苦草母子を守り人のうらを
 るる日下勇立ち早踏々と來まざる味を參順吐嗟と仰天を留
 を飛きて馳行し程を追手て既苦草等が側へ至りて用捨の
 るく騎ある馬の大腹を鎗りて禺差と刺續りて控が倒るるや
 諸共苦草母子も擲と落ち逃人とたせれど何ぞ悲しや
 落ぬためと累の程繩りて楚と結付たれが身動き
 也為一うく屠所の羊を異ならぬ悲懷を三途八難の苦

るれど此の身動とてもえらるるを其行く處より任まらる程子免角
ちて鷺を江守を瓜す掴み 海上南へ十二里有餘を飛
行きて佛蘭西國の北の濱辺なる嘉蔭と云ふ處に來り其
處より立ち上る最大きやうなる榎木の梢の恰好に枝を密と江守
を置たりる事の不思議を江守をひくと呆果て彼れゆゑの
るをやらんと其儘の志と在る程に鷺を懸て羽を振ひ一聲
高く叫びつゝ何處ともなく飛去るを江守を心稍く落居り疾く
こゝの隙を逃まらんりぬと静く枝を傳りて下の牙へと降るは
此頃此國の瞬時の風習多うはれが木石を崇め
神と事ぬる者甚くはれが今江守が鷺のたぐり置
く榎木の枝を伐て事く更なる一之榎に登る事も嚴志
く禁ずる然る者たるを忽ち地神の怒り觸れ近郷
まをり厄難を及ぼさる事ありと云ふ様子知りたる里人
も驚き

敬して此前を過る由も容易を得行くも恭ましく禮拜し然る後
不行過る我常とせり素り江守は此等の事を毫も知らぬ
を對向の方より里人二名斗其採耕夫も覺えぬの鋤鉄肩
す打掛たり連立て來まらる機曾これとられと打控ひてこの
里人等が近附くを待つはどふ里人え斯とも知らぬを懸て木下小
邊の地を附け江守が方より打向ひて禮拜する
事頻るれが江守は何とも意を得ぬ其身未だ樹上におられ
此二小兒頼り下を身をよと思ふのさう枝蔭より面を
現るやも里人什麼も遣え何の故かをさまをる禮拜あつるを
吾儕もつて曉り難くはれが知るをゆゑ吾儕速未
是英倫の者まりり料らるる厄小遇ひ父母や死別れ味あり
生別れ死をさう得るれを加之吾儕も其時鷺の擱る處とな
り海を起て此梢に置られし下んとす
るれども木の牙を幹太く足便とすを枝あり免す由角

取らぬまゝに里正夫婦を斫殺し家々を火をこらして焼拂ひ去りし
海岸に陣を構へる者皆々集りて居り然るに此時羅卓父も里正の
用成帯比と近郷を往きたるの其事果て歸り來りて浅き家
を失せし残る處も灰燼のなれど免れ角も免れ様も免れ其
處より少しも里正を見ず馳來り解由を詳し泄さば語らば羅卓
父も齒を食はれしに獨り思案をなす身も父も母も母も
世に人者なるもの年々も里正を養ふれし恩義をわたり且この
まじり林人成捨置きたる邊より一國の難儀もなれ保ちて是れ思
彼れ思へど思ふと何處もなき助るもなき我命を抛ちて養はれし重
正の怨を報し又一つは國民の禍多し鋤去らんも思ふ心を人よは口
を其夜も知己の家を宿成借りて相明る日と成りし喜びを顔別を
つと何處ともなく立出つ免れ角も免れ日を暮るも務め嗜まき持
たる短刀を携へし小夜更る頃丁林人の軍中より忍入り遂に手も白く
頭も殺して暗く紡ぎしと逃いで罷り一夜の宿成借りたる里人の家

馳至り解悠々と皆知るせが里人驚喜びし其夜の中より里正の
誰彼を呼集り羅卓父成引合はるるを心ならず仕候て感之り勵まされ
進出て異口同音し吾儕ともも始より丁林人の狼藉成憎まざる
のあはれも力強き及びしと思返さず黙せし今を和主の
勇行成知る此儘の何れんや時を移さず押寄きて叔們
を塵よな日頃の鬱憤を晴せし請給へし以つても早立上ま
羅卓父も異議もなき諸共馳着きて散々荒回る頭人既
あまきれが丁林人死狼狽も我先りと路成争ひ邊に於る小舟を飛
乗りて辛く本國より逃行きたる羅卓父が望み十分小行せし今も
小舟の里人の喜ぶ一牙も是れ全くと羅卓父が仁義
の致を處ちりし羅卓父と諸共丁林人の陣を撃入たる仕後達
を初として里正の同と乃ち後の里正たる事を羅卓父が言
出たも羅卓父も敢て隨ふ其職を當り難き事
數回小及ぶるも里人此も許さ事なく請迫る漸く

是人の用を辨へ人の益を爲す事... 然るべきものありしとあるも... 拒之登る事と免角も枝下... 木精有りて在まてのなを持つこと... 宿れる鳥の宿るも大枝小枝の蟬悪... せく丹物ヲ街れ老人の所為... 不非を人則之と殊有り大人... 不我を切論の事をも禽獸... 非を人則之と殊有り大人... 鳥と救を人ぞが宿を給... 不我を切論の事をも禽獸... 不非を人則之と殊有り大人... 鳥と救を人ぞが宿を給... 不我を切論の事をも禽獸... 非を人則之と殊有り大人...

此榭木の枝有はと言放ち... 然るも羅卓父を左もこそ... 有りぬ吾儕杜松連と諸共... 傳て各位真と心得はの... 種々肺肝を碎きて素此木... 玉の闇の夜更ら須ちと... 此榭木の適宜持枝... 持歸り物置庫深く杖と... 人の心と度々思ひも又つ... 不手はそ上策有れと先之... 不手はそ上策有れと先之... 不手はそ上策有れと先之...

ろくろ居たりしが思決りて羅卓父が言葉に隨ひ養ふれんことを請ひられ羅卓
父を異議なく承知志家の奴婢あり心得し是より月日を経る日ごとく江守を
萬事一に用ひつととて階間をたれ羅卓父夫婦の者もいと愛慈うとく
瑠璃ととも育てはる談柄一轉後又英倫の王亞弗勒と頼訥が討死の注進を得
ゆるおち諸將と共に渾て唯一の兵卒を引率とて辱々丁林人を撃靡りせて
打拂とんと為せしりて這回も丁林人も注意とて輕快くも戦ふ漸次々々
本國より新牛の勢を引入る諸處の城を陥れ勢漸加するも其勢十
五の外不出で充満りて其年の暮り既り威士西まで來りはれが亞弗勒ハ
証言あり就思軍をゆる後將士を説諭を給ふやうに性るこちも此國
より連年殃禍打統き万民手足を息も暇なく又も今の体裁を朕の痛
苦不堪なる處縱哉今の時下何りて皆一心に御をもも窮乏とて衆を
敵と難くされがとて手て束ねて阿容々々として撃つるも又これ
勇無き業をこそ逆しるるも身命を擲つるも其れも今迄
一旦の耻辱を忍び思ひ小身で竊めて機會を伺ひ起るる如くも朕

遠來の孫人より由縁の者で尋來るも其者又此處に在るをされも後不立
歸るも本意ならは尙こてか大と歩むほふ秋の日の最短き早黄昏とはなる
もめも孫人宿とも見當るる殆難儀に及ぶるも極き者も候もをたれ宿
言を貸給て又他事も無く言するは内一人の若者なり事趣諾り此方
來り門を開き亞弗勒主役の眸を凝め之で見ると年が二十斗り鼻
算眼光鋭く色黒く頬瘦れ身纏ひある粗織の衣を穿て
たれも自ら氣鬪を備へ頭を置きたる帽子を所々破れ多れも尚風彩で
添ふる如く素まて賤し何れも何となく人品高きハせり器量ある
者甘めりと思へ懐き亞弗勒會釋をまき彼若者も熟と亞弗勒が
侍とて怪りるを知らず禮を正し言つるや宣ふ趣最揚も汚穢
かき厭ふは免れ角も一々参らせん母屋に入りて顔体給てついでに誘
導するも亞弗勒勤も陸を漸く落行き引る儘に進入り奥の間に入れ
た彼若者もこの方々此孫人と我國の亞弗勒王と知るべし唯尋常の者と思れ
と姑息し厨の方より肉も添へる二塊の麵包を附し乾酪と生菜を併

えぬハ快く宿を貸し夫とあり、下田弗勒が事と、始め江戸と美麗が事と(尋ね
知りなきなり)、と知る由して下田弗勒の途次、そのさる男子と其重を見給て、お知
らむとをの)宿を貸す。本意をけり、然らざる誠、証行あり、翌日羊を買入れ
り、
あまて行ふは、其時人あり尋ねえんと言ひつゝ思附き、小之、暴れを因
の形勢あると田舎人あり、さきき話あり思て、居打馳り、申事し、ま、申さる
今日も我卿夫婦の者も近き里、さる高僧(いじり)の法談、ゆるよし傳聞て、晝過頃、
出行あり、式下、下、帰来つ、今も西過とも思、はま、體て帰るも程候、
程の疲弱や、候も、納戸の方より、床を侍り、夜臭も、暴程備へ、多、其儘、
寐まり、給、と言ひつゝ、手燭を、携へ、案内、と立上り、下田弗勒、
を止め、ほまひ、く、直る、なり、斯、斯、と行届きたる、款待の有難き、我輩、之、信せ
て、斯、もの、厚き、事、あり、さ、れ、が、仰、小、隨、ひ、直、り、取、床、小、入、り、ま、さ、り、先
其、さ、れ、問、御、身、が、仕、主、人、の、名、を、何、と、呼、お、し、人、の、聞、く、せ
あ、ま、と、い、ふ、は、折、り、門、の、戸、推、開、き、入、來、る、者、の、向、り、は、ま、さ、り、
下田弗勒、
不、姑、々、待、た、せ、あ、ま、と、い、ふ、言、ひ、つゝ、立、て、彼、方、を、指、し、急、に、
快談雪裏竹卷終

快談雪裏竹卷四

東京 樵耕蛙船編

第十三

きて、と、門、で、押、開、き、入、内、に、請、を、入、來、り、ハ、是、則、別、人、な、る、を、
と、柳、賀、の、名、を、波、緑、船、と、呼、れ、柳、の、名、を、愛、毎、と、い、く、夫、婦、に、田、參、
波、緑、船、を、悲、慈、善、根、を、積、む、て、好、く、人、を、憐、れ、の、心、を、唯、法、談、を、
其、途、次、少、く、は、皆、を、見、下、供、養、を、と、こ、と、此、上、る、を、樂、と、信、ト、
の、さ、る、法、談、を、打、聞、て、姑、刻、其、処、少、く、は、自、ら、早、晚、日、も、暮、果、
婦、も、馳、と、家、路、を、指、し、打、連、立、ち、帰、來、つ、案内、に、素、り、知、り、
は、ま、さ、り、斯、と、も、知、る、を、參、又、門、の、開、き、打、驚、き、何、誰、
立、出、て、見、ま、は、是、卿、夫、婦、な、れ、が、即、之、て、迎、ひ、後、
ま、さ、り、一、夜、の、宿、を、貸、さ、る、と、事、趣、告、知、し、
此、ら、夫、婦、を、い、ち、く、打、喜、び、其、て、よ、き、功、徳、を、
山、の、話、の、序、に、波、緑、船、を、い、ち、く、見、ま、さ、り、如、き、
不、自、由、な、事、と

頃日世話也。里の翁物故より其財産を頼つて者なきより翁が遺せる言として
十五頭の羊をば可が方より送りゆくが姑時之を受收め翁がたのう。追善供養を執
行せんともうらふめりて家て無定ぬのて之を飼ふこと極め難く且
牧場を價廉く品良き羊数頭賣り出で買給てはやといふえめりて若これを
しも買入るるハ愈手及ぬといふも良き品を見ても買入るるも智ある事
不似り進退ま下谷ましく性も頼も誰彼不頼も事ねし下男で
求むまとも戦乱の折なきハ来んとし人し何れ無礼ものも御身としに當の在
ちがえり世話して賜をばやといへば重弗勤の心底に何やせん思附きぢぢに苦しく
候へ所詮誰彼と撰むんや我輩ニエまら如何なる人斯く申言る我は此
と願事ねまことの何れも然るも方より住まへと思ふ今も主人の言を聞て渡
り下舟と思ふる給金なるも望ましくは只召仕に賜をばやと思懸る事
言葉より波緑船をつくと重弗勤の顔打守り呵々と打笑ひおそ乘き筋持
る戯れや候はるる小可累ら御身背之を熱と拜する何となく威風
凛々御言葉の風雅なる御手指のいと細きは是由緒ある人の身と思ふる





